

ヨットの話・・・何でも訴訟の世界

「何でも訴訟」というよりも自分では決定することができず、誰かの意見を聞きそのとおりに動く。しかし責任はその「誰か」なのである。「何でも他人の所為にする」のほうが正確かもしれない。

昨年 11 月末、強風波浪注意報（というより警報）の中、阪大のヨット部の連中が何隻もヨットを出してひっくりかえった。・・・バカとしか言い様がない。・・・自分の実力も知らずにこの強風の中ヨットをだすことすらみっともない話である。昔、もっとバカがいた。今回はそんなことがないと思うが、小生が学生の頃やはり阪大のヨットが転覆して全員投げ出された。その中に「泳げない」のが 2～3 人いて、溺れていた。たまたま助けたのが小生の友人で、「よう泳がんにヨットなんかののるな！」・・・これは正しい。

同時に舞鶴かどこかでやはりヨットが転覆して遭難したのが言う、「ハイ！ みな元気です。」・・・ノー天気なやつらで親の顔が見たいワ。海上保安庁の職員らはそれこそ危険を冒し身命を賭して捜索救助活動をしている。用事もないのにふらふら出かけて彼らの貴重な生命と時間とを浪費させるな！

もう 10 年以上も昔の話になるが、当時書いたものが残っていた。

「ヨットで太平洋にでかけて、天候不良でひっくりかえったら大海原の真ん中だ。万一の際の救難信号を発信する術も知らず、命を落とす可能性も考えずにノコノコと頼みもせぬのに**遊びにでかけた**。

ヨット協会も海上保安庁が捜索にでるといふのをおしとどめて様子を見る、と言いながら、いよいよ不安に駆られて挙げ句の果てには「考えられない事故だ」と逃げ腰になる。　相手は大自然である。

なにが発生するかわからないのが常識である。数秒先、数分先のことを数日先のことを予測しようとしないう、あるいは生命の危険があることを予測できないのは、進化から遅れている。他人がいくら「安全だから」と言ったからといって、疑いをもたないほうがおかしい。

それでも、なんとか救命ボートに乗り込んだ。どこにいるかは、本人らも含めて、まったくわからない。漂流中に海上保安庁の捜索機が飛んでいたが**見つけてくれず、仲間の何人かが「気を落として」亡くなった。・・・この程度の覚悟で遊びに行っとんねん。・・・この家族（遺族）が、捜索に遺漏あり、と訴える。・・・なにを甘えているんだろう？・・・ここ 10 数年来、顕著にみられることのなかで、もっとも卑劣というか、薄汚いというか、**自己責任を肯定することなく、相手が「武士の情け」これ以上責めるのは酷****

だから沈黙を保ってやろうとするのにつけあがって「何事も他人の所為にする」風潮が幅をきかせているのを苦々しく思っているのは小生だけではないだろう。

現代なら船もよく通行するし、小型飛行機が偶然見つけてくれることも可能性として考えられる。・・・そんなことを言うなら、幕末の、例えばジョン万次郎なんかどうするのだ。孤島に漂着して、今よりもはるかに船が通る可能性が低いし、無線もなく、信号ももたず、無人島だからまず自分たちの食料を確保しなければならない。しかも、万次郎たちは「遊び・レジャー」に行ったわけではない。かれらは、生活のために漁にでかけて災難に会ったのである。

保安庁はじめ、他人に充分な迷惑をかけておいて、感謝するならともかく、訴訟までするとは・・・まるで盗人が「警察がいるからつかまったじゃないか」と逆恨みするようなものではないか。

米国ではなにかあればすぐに訴訟にもっていく。なぜなら弁護士が自分たちの生活のために訴訟をそそのかすのである。だから、米国でも、心ある人は「なんでも訴訟になってしまって味気ない世の中になった」となげいているのである。勘違いも甚だしい。

2009.12.05.